

春燈

10月号



万太郎の句

かまくらをいまいうちこむや秋の蟬

句集『道芝』 大正十五年

日暮里諏方神社の祭礼である。「かまくら」は祭囃子の曲名で発祥地の葛飾鎌倉の名が付いた。折から太鼓の打ち込みが始まり、それに合わせる様に秋の蟬が鳴き出したのだ。万太郎がこの神社の前に移って来た頃の日々が、家庭的には生涯で一番幸せだったのだろう。そんな或る日の一齣を見る思いがする。戦後五十年諏方神社の氏子であった私には忘れられない一句なのである。

長 浜 徳 三

万太郎の句

秋扇たしかに帯にもどしけり

句集『これやこの』昭和十九年

昭和十九年、万太郎五十五歳の作。ひとがこの世に生を得て青年期・壮年期を経て熟年期に入ったものには、秋扇の季題に堪らなく哀歡を覚える。掲出句の愛用の秋扇、あるべきところに戻しそれを確りと確認した。万太郎自身のこれまでの来し方を顧み納得して、更にこれからへと決意を新たにしている力強さを感じる。因みに、翌二十年十二月「春燈」誌が印刷されたのである。

和田孝村

主宰の句

西ヶ原日記 (十一)

鈴木榮子

敗戦忌友のたれかれ引揚者
拭ひたる眼尻の泪に汗の塩
西国札所無量寺の地藏盆

地蔵盆小寺へぞろぞろ子ら集ひ
秋高し棒高跳びの美技空へ
灯台下暗き松茸狩りなりけり
新生姜てふ薑をいただけり
仕事帰りの良夜の月の高々と
白桃に無駄の一指は触れまじく
古町に氷室のありしいまもあり

蟬しぐれ

小宮節子

葛飾をつらぬく川や小鯨刺
青鷺に対岸の楽とどきけり
父の日のポプラ並木や風鳴れり
水打つて椅子六脚の珈琲店
不忍に古りしベンチや敦の忌
鬼灯市青き雨呼ぶ夕べかな
永代橋を渡りきつたる暑さかな
つりしのぶ菊坂に蔵のこりをり
夏菊や橋のたもとの戦災碑
楷の木の大らかな陰や蟬しぐれ

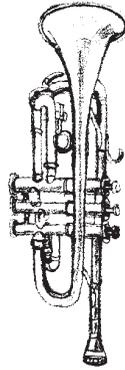
過ぎし旅の日

水上多美子

ムームー縫ふ南の国に思ひ馳せ
ヨットハーバー眼下に島の夜明けかな
椰子の実に触るるばかりや二階バス
目元涼しき馬の親子や右ひだり
白樺の花咲く基地を訪ひにけり
峰雲や船を止めたる真珠湾
父憶ふ日の夏濤の高さかな
夕焼や三世うたふ「赤とんぼ」
パイヤに飽きて郷愁しきりなり
旅果ての空港に雷とどろけり

当月集

鈴木 榮子選



太田佳代子

母のぬし町片陰の多き町

傘一本のこる大甕蟬時雨

夏鴨の影となるまで泳ぎたり

ふるさとや暮れゆく夏の日の重さ

青竹の青の濃淡夏の雨

吉田かずや

口笛で終るシャンソン夏行けり

六本木ヒルズのガラス涼新た

踊る妻と視線が合へりとまどへり

群衆の頭上に手の舞ふ阿波踊

輪に入りてまつ手を打てり盆踊

菅沢陽子

夏山や迎へはセント・バーナード

冷凍マンモス動く歩道に見たるかな（地球博）

懐石膳湯引きの鱒の白さかな

浸蝕のはげしき岩や浜おもと

結納品の水引細工秋涼し

白神知恵子

樽の匂しるして七月八日かな

盆栽にすがらせ愛づる蟬の殻

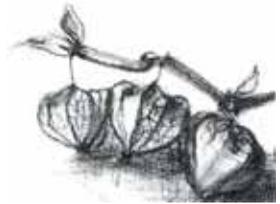
水琴窟空蟬の眼の安らけし

届けむと待つ夕菅の咲き加減

叱られし児に叱らるる羽抜鶏

春燈の句

鈴木 榮子選



鬼灯市買ふや丹波の一つ鉢

東京 山川 好美

峰寺の風の小夜曲萩若葉

泥鰯鍋薬味の箱の葱七味

若衆と法被揃へて盆踊

洗鯉仲居頭の江戸言葉

油虫必殺どきを窺へり

岡山 中桐 葵子

四万六千日帰りは舟の隅田川

夏痩せて長子の伽を負ふ子かな

そよぎなき蓮の丈の難儀かな

千葉 横田 初美

言ひにくきことをさらりとサングラス

蓮の花白見てをれば紅が咲き

反骨の性をあらはに子蠅螂

蓮の葉をゆすり玉露と遊びけり

朝市のモロツコ豆や夏の風

東京 後藤眞由美

蓮酒に太古の草の匂ひかな

夕闇より融け出て咲くや烏瓜

黒揚羽ゆらり狭庭に妻の忌来

神奈川 金子 輝

地ぼてりを足裏に残し猫もどる

魂還る妻とシャンソン盆月夜

星月夜宙より戻る人のあて

ペルモコ坂駈け降りし酷暑かな

通院の日焼けと共に癒ゆる腰

東京 久永 淳子

さばさばとお江戸へ戻る夕立晴（悼・杉浦日向子）

八月の木樺が雨を恋ふしきり

日の没りや向日葵千本後向き

京都 岡井しげ女

ひまはりをすつくと挿して夏の果て

蘇州を想ふ二胡の調べや夜の秋

現代風の国籍不明盆踊

余言

鈴木 榮子

踊る妻視線が合へりとまどへり

吉田かずや

この句私もとまどいました。住居のある駒込では例年各町内で盆踊が行われており、遠くその太鼓の音を聞きながら仕事をするのはよいものでした。

私も通り掛りに見て、あの手足の長いTシャツの学生は一拍遅れながらついて行くとか、あのインテリ夫人はどうしてそんな気になるのか、ゴールデンレトリバーが待っているのにとか見ている方もいつ時楽しめませぬ。

作者はなに気なく踊りの輪を見ていると、何かの拍子にぱったり妻と視線が合ってびっくりしたのでしよう。

まことに羨しい風景です。こういう場合大抵ご主人或は男の方が妙に恥かしくなってしまうて、それがよく言えば男の含羞なのでしょう。よいですね。

汝ひとり眼で追ひし日や踊の輪

伊東 湘三

こういうことはあります。また前の句を角度を変えた別バージョンです。みんな若い日にこういうことがあり、また、繰り返すのでしよう。

漱石の小説の中で、驚くうちは楽しみがある と誰かにいわせてますが一生迷える羊です。(以下略)

打ち水にふるさとの土匂ひけり

上野 進

打水はなにげない消暑法ですが、趣のあるものです。

朝夕水を打つ、水を打って客を迎える。清める心、涼しさの演出、それを行う女衆、男衆、家庭では子供の役でした。なにか清々した気分になれます。夏休みには朝も撒いたように思います。商店ではほこりが立たないように道路に水をまいたのでしよう。散水車なども電車通りには時々走っていました。

帰省して ふるさとの土の匂ひ を敏感に感じられたのです。